
無限のナイトメア

高月望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限のナイトメア

【Nコード】

N7683Y

【作者名】

高月望

【あらすじ】

あなたはどんな夢を見ますか

高原いつきは普通の高校生。そんないつきの前に現れたのは美少女の転校生だった。しかし、それを境に見始める悪夢。その悪夢は学校中に広がりを見せ始める。一体何が起きているのか。転校生の彼女との関わりは。いつきの友達をも巻き込みながら、悪夢の六日間が始まる。初めて書きます。拙い文章ですが、暇つぶしにでもどうぞ。感想などお待ちしています。

プロローグ

「……見つけた、見つけたぞ」

その声はまるで地の底から聞こえてくるような低く、重い声だった。だが、その声は歓喜に満ち溢れていた。それは長年探していたものが、見つかったかのように。

しかし、私は声の主を見つけないことができないでいた。

何故なら、ここは闇しかない真つ暗な空間だったからだ。

私は、そんな闇の中を、あたかも暗い海の中に浮かんでいるような、そんなふわふわした感覚で漂っていた。

「見つけた、見つけたぞ」

「……誰だ……？」

私は声の主に問いかけた。

「私に名はない。しかし、お前にとって救世主となりえるだろう」

「……どういうことだ？」

「どうもこうもない、言葉のままだ。ふふふふふふ」

私は次第に恐怖を抱き始めた。さっきまでのふわふわした気持ちだが、だんだんと覚め始めているのを感じる。この声を聞いてはいけないと体が、心が、反応している。しかし、声の主はそんな私に気付いているのかいないのか、さっきよりもまして低く、重い声で、しかも優しく問いかける。

お前の願いをかなえてやろう……と。

相手の姿は見えないのに、それは耳元でささやかれたような感覚だった。心が揺れているのを感じる。まるでそれは悪魔のささやきだ。声の主が何者なのかもわからないというのに、私はその魅力的な提案に惹かれている。それほど私は欲しているのだろう、自分の

願いがかなえられることを。

「さあ、望め！望めばその願いがなえよう」

「…………はい…………」

僕は急いでいた。

なぜ急いでいるかという簡単なことだ、遅刻しそうだから。朝遅くまで寝ていたせいで、いつもより遅い時間に出る羽目になった。走って学校に向かう。

僕の通う高校は住宅街の中にあり、その利便性と制服のかわいさから人気の学校となっている。大きさは全校生徒六百人というまあまあ大きな学校である。一応、進学校である。

そんな学校への通学路は、鳥のさえずりに加えて、登校する同じ学校の生徒たちの笑い声が聞こえてくる。今日は天気も良く、清々しい朝の日差しが降り注いでいた。

僕は立ち止まり、携帯を出し時間を見る。走ったおかげだろうか、十分に間に合う時間帯だ。僕はホツとし、ゆっくり歩き出した。呼吸を整えながら、朝の空気をいっぱい吸う。清々しい空気が肺に満ちていくのを感じる。差の日差しも春の陽気を含み、温かく気持ちいい。

そんなポカポカ陽気で歩いてみると、急に首に重みを感じるではないか。見ると首に誰かの腕が巻きついている。その重みで体がだんだんとのけぞっていく。しかもその腕はだんだんと自分の首を絞めてつけていく。次第に息をするのも苦しくなってきた。このままじゃ死ぬ。身の危険を感じ、

「ギブ、ギブ！」

僕はその腕をたたきながら、必死に降参を訴える。するとその腕はすぐにほどけていった。僕は誰だと思い、首をさすりながら後ろを振り返ると、そこには見知った顔があった。

「驚いた？おはよう、高原いつきくん」

満面の笑みで僕にあいさつしてくれたのは、僕にとって数少ない

女の子の友達である雨宮美雨さんだ。彼女はクラス委員長でもある。しっかり者で誰にでも優しく、平等に扱ってくれる人だ。そのためクラスの人たちからの信頼も厚い。頭もよく、学年トップ。その座を今まで一度も明け渡したことがないそうである。

「歩いていたら、高原くんの後ろ姿が見えたから、つい抱きついちゃった。へへへ」

「…むやみに男の子に抱きついちゃいけません」

「どうして？高原くん、嫌だった？」

「そ、そうじゃないけど…」

「…分かった、これから気をつけるね」

今の会話で分かるように、雨宮さんはちょっと天然なところがある。またそこがかわいいという男子生徒も多くいるらしい。僕もその一人である。

そして僕たちは一緒に学校へと向かうこととなった。横に二人並んで歩いていると少し恥ずかしい気がするのはどうしてだろう。僕が意識しすぎているからなのだろうと思うけど…

「あ、そうだ。高原くんは知っているかな？」

「えっ、な、なにが？」

突然、話を振られて驚く僕。今、自分が考えていたことを思い返し、顔が熱くなるのを感じた。

「あれ、高原くん、顔赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ。それで何？」

「あ、えつとね、今日、転校生が来るんだよ」

「今日？急だね」

「そうなの。先生がみんなを驚かしたくて内緒にしたいみたい。だからみんなに言ってないんだけど…私は委員長だから教えてもらってて…あっ！しまった。内緒だから高原くんにも言うのはまずかったのかな？でも、もう言っちゃったし…どうしよう」

おろおろする雨宮さん。そんな姿を見て僕もおろおろしながら答える。

「い、いや別にいいよ。ただ今日の転校生が来るというサプライズがサプライズではなくなっただけだって言うだけだし、大した損害ではないよ。それにみんなが知らないことを知っているという優越感があるっていいと思うし」

「ご、ごめんね…」

「あ、謝るようなことじゃないよ」

「で、でも……」

本当に申し訳なさそうに謝る雨宮さんの姿に、僕もどうしていいかわからずにいる。こういう時にちゃんとフォローできる人間になりたいと思うが、今の自分ではそうはいかず、あわてて話題を振ってみる。

「で、転校生って男？女？」

「…話では女の子だよ」

「女の子か……」

「高原くん、何か企んでいる？」

「なにを言いますか。企むことなんてないよ、どっかの誰かさんとは違って」

そうこうしているうちに学校に着いた。

僕たちはそろって二年三組の教室へと向かう。教室の前まで着くと中から楽しそうな話し声が聞こえてくる。僕はドアに手をかけ、開き、二人で教室に入ると、

「おつやくお二人で登校ですか？」

聞き覚えのある、ふざけた声がした。

「おはよう、龍臣」

「おはよう、いつき」

目の前にいたのは僕の悪友、瀬田龍臣である。茶髪にピアスといういで立ちに、ナンパな性格も相まって、問題児の一人となっている。でも、根はいいやつで一緒にいると楽しい。

「おはよう、兩宮さん。今日もかわいいね。今度一緒にデートでもどう？」

「おはよう、瀬田くん。いつも元気だね」

「もちろん、瀬田龍臣はいつでも元気ですよ…痛い、なにすんだよ」

ドヤ顔の龍臣を、僕は一発殴り、席へと向かう。

隣の席には川島明くんが座っていた。

川島くんは、端正な顔つきと寡黙さが、女子には人気となっている。僕とは席が隣同士ということもあり仲良くなり、ちよくちよく一緒に帰ったりする。

「おはよう、川島くん」

「おはよう」

僕は改めて川島くんの顔を見て、ぎよつとした。その顔には生気がなく、青白く、まるで死人みたいだった。僕は驚き、声をかける。「だ、大丈夫？川島くん。顔色が悪いんだけど…」

「大丈夫」

「で、でも……」

そこに龍臣もやってきた。

「うわ、川島、大丈夫か？顔色すっごく悪いぞ」

「大丈夫」

「大丈夫じゃねえよ」

僕は再度、川島くんの顔を見た。その顔は本当に生気がない。周りの人が心配になるぐらい顔色が悪いのだ。

「風邪でもひいた？川島くん」

「いや、…悪い夢を見たんだ……」

「…夢…？」

僕が再びどういいうことか尋ねようとしたとき、ちょうど先生が教室に入ってきた。

「こちら、席に着けよ」

その声をきつかけに、生徒たちが次々に席に座っていく。僕も仕方がなしに席に座るが、僕の視線は川島くんのほうをちらちらと見つめている。友達だから心配なのだ。

「みんなに大事な話があるぞ」

先生がうれしそうに話を始めた。僕は川島くんが心配だったが、仕方なしに視線を先生のほうにむける。

僕の席は後ろから二番目の窓側の席なので、教室内をよく見渡すことができる。みんなまじめに先生のほうを向いて、その話に耳を傾けている。

「ええと、まず一つ目として、新しい保健の先生が赴任してきました。名前は夢野先生です。前の保健の先生だった山田先生が産休に入られたためです。」

次に二つ目ですが、これはみんな驚くと思いますが、うちのクラスに今日、転校生がきます」

「ええ」

みんなが驚きの声を上げる。クラス内がざわめきだった。それを

聞いた先生は、どこか満足げにうなずいていた。先生はこういう反応を待っていたのである。すでに知っていた僕は、ただただみんなのことを観察していた。驚き、喜ぶものがほとんどだった。僕は隣の川島くんを見るが、まっすぐ前を向いたままで何の反応もない。やはり顔色は良くなつてはならず、いまだ青白いままであった。

「さあ、入って」

先生が廊下にいるだろうその転校生を呼び出した。

コツコツコツ……

先生の言葉を受け、転校生が教室に入ってくる。その姿が目に入ったとき、教室のざわめきは一瞬でなくなった。静寂が教室を包み込んでいく。

誰もがその姿に目を奪われた。

黒く長い絹のような艶やかな髪をなびかせて、みんなの前に立った少女に。

大人っぽい中にまだ少女のあどけなさを残した端正な顔立ち、よく見ると吸い込まれそうな黒く凜とした大きな瞳。姿や雰囲気、すべてが美しかった。制服もまるで、彼女のためにあしらったが如く着こなされていて、ただ素晴らしいの一言だった。

「夢野夢子です。よろしくお願いします」

彼女は声も美しかった。

そんな彼女の声を聞き、クラス内は我に返ったかのように再びざわめきを取り戻した。男子たちはうっとり彼女を見つめ、女子たちは嫉妬や羨望を超えて、ただただ脱帽していた。

僕もクラスメイトと同じように彼女の美しさに目を奪われてしまった。

すると突然、

「僕のフィアンセだ」

そう言い立ち上がったのは、だれでもなく龍臣だった。

「こんなきれいな子がうちのクラスに来るなんて、まさしく運命。僕とデートしてください」

そう言うのと周りからは大ブーイングが巻き起こった。主に男子からで、抜け駆けするな、ずるいぞといった文句であった。転校生の彼女はというと完全に無視だった。龍臣のほうさえも見てはいなかった。がつくしと肩を落とす龍臣の姿は面白かった。

しかし、転校生が来ることは分かっていたが、こんな美少女だったとは驚きである。雨宮さんのほうを見ると同じように驚いているようだ。やはりこの事実には知らされていなかったのだろうか。

僕は再び彼女に目を戻すと、目があったような気がした。僕は焦って、急いで目をそらした。しかし、考えてみると彼女が、僕のほうを見るわけがないのだから偶然に違いないだろう。そう思い、再び彼女のほうを見ると、今度はばっちり目が合ってしまった。しかも、完璧に僕のほうを見ているではないか。何かの間違いであってほしいと願うがそうではないらしい。

そんな彼女の視線に気づいたのか、クラスの何人かは僕のほうを見ているではないか。居たたまれない気持ちになり、どうしていい

か分からないでいると、

「夢野さんの席はあそこだから」

先生がそう言いながら指さしたのは、僕の後ろの席だった。

またクラスの見線が僕に集まる。今日ほど僕自身、注目を浴びた日はないだろう。そんな見線には耐えるしかない。

彼女はその先生の言葉に従い、席に移動し始めた。こちらにだんだんと近づいてくる。近づいてくるたびに僕の心臓は早鐘のように鳴り響いている。美少女には慣れていないのだ。しかし、僕は冷静を装い、何もないような顔で彼女が通り過ぎるのを待った。

だが、そんな僕の気持ちを裏切るかのように、彼女は僕の席の横で立ち止まったのだ。そして、目を丸くし驚いたような表情で僕を見つめてくる。そんな表情もきれいだなと思いつつも、僕はその視線に耐えきれなくなり目をそらす。

すると突然、身を乗り出し顔を僕のほうに近付けて匂いを嗅ぎ始めたではないか。僕の顔と彼女、夢野さんの顔が近寄っていく。僕は内心パニックを起こしていた。なにが起こっているのかまるで理解できないでいた。教室内もざわめき始めている。顔がみるみる熱くなっていくのが分かる。きっと僕の顔は今、ゆでダコのように真っ赤になっているであろう。それに加えて男子たちの敵意ある視線を感じながらも、僕は必死に耐えていた、心の中で早く終わってくれと願いながら。

しばらくすると夢野さんは満足したのか、僕から顔を離れた。僕はそれにホッと胸をなでおろす。そして彼女は、席に座っている僕を見下ろしながらこう言ったのだった。

「あなた、私と同じ匂いがするわ」

「どうしてなんだよ〜なんでいつきなんだよ〜」

「どうしてだろうね」

「…ずるいぞ」

「代わってくれるなら代わってもらいたいけどね…」

放課後、龍臣と一緒に帰ることになった。僕たちは話しながら廊下を進む。廊下は帰る生徒や部活動のある生徒で混雑していた。耳を澄ましていると、どうやらうちの転校生の話をしているのが聞こえる。やはりあの美貌なので、うわさは瞬く間に広がったようだった。あつちこつちで聞こえてくる。僕は大きくため息をついた。

「おっ、どうかしたか？いつき」

「…なんでもないよ…それより、川島くんは大丈夫かな？」

「川島か？あいつ一日中、顔色悪かったもんな。で、さっさと帰ったんだろ」

「うん。でも心配だな…」

川島くんのことでも心配ではあるのだけれど、しかし、僕自身も大変なことになったのは間違いない。

噂でもちきりの美少女転校生に目をつけられてしまった。

あの朝の一件から彼女、夢野さんは僕のことを観察するかのごとく見つめていた。他の人が話しかけても目をそらすことがなかった。その結果、丸一日中、彼女の視線を感じるようになった。

一体何が原因なのか、僕にはさっぱり見当もつかなかった。その間、男子たちからは敵意のこもった視線を感じたのはいくらでもない。

僕はそれを思い出し、また深いため息をつく。明日もこんな調子だったらどうすればいいのか。

そんな僕の、玄関へと向かう足取りは重いものとなっていた。し

かし、今日はこれで終わりだ。あとは家に帰るのみ。夢野さんからは解放されるのだ。今日のこととはひとまず忘れようと気を取り直し、さつきよりは軽い足取りで玄関へと向かう。

しかし、そんな思いも一瞬で粉々となった。

玄関には夢野さんがいた。

しかも、帰るそぶりも見せず、誰かを待っているかのようにこちらを向いて立っていた。

「マイスイートハニー！」

龍臣は夢野さんを見つけて、うれしそうに駆け寄っていく。それに対して僕は重い足取りだった。まるで、天国から地獄に突き落とされたような気分である。

「どうかしたの？誰を待っているの？暇ならデートにでも行かない？」

龍臣が矢継ぎ早に質問するが、夢野さんは完全無視だ。

僕は努めて冷静に、何事もなかったかのように龍臣を無視して、夢野さんの横を通り過ぎようとした瞬間、

「やっぱり、あなた、私と同じ匂いがする」

そう、ぼそつと彼女はつぶやいた。

僕はそんな言葉を無視して歩を進めようとした時、何かに足を取られてつまずいた。よく見るとそこには、スラッと伸びたきれいな脚があった。そう夢野さんの脚である。

「まだ話が終わってないのだけれど」

僕は目を丸くして、夢野さんのほうを見る。まさか、口を使わず足を使うとは、顔に似合わず恐ろしいことをする。運動神経があまりよろしくない僕である、下手をすれば顔面をぶつけていたかもしれない。少しだけだが彼女の恐ろしい一面を見た気がする。

「僕に何か用ですか？」

僕は猜疑心ばりばりで答える。

「どうして私と同じ匂いがするのかしら？」

「言っている意味がわからないんだけど。用がないなら帰るよ。」

それにもう僕にかまわなideくれるとありがたいんだけど。じゃあ僕は、これ以上付き合ってはいられないと思い、足早に玄関を出ようとする。すると待てよ〜と言いながら龍臣が付いてくる。龍臣は少し名残惜しそうに夢野さんのほうを振り返る。

すると後ろから声がかかる。もちろん夢野さんだ。

「気をつけなさい。これから不吉なことが起こるから。あなたもきつと関わってくる」

外はすっかり夕焼け色に染まっていた。遠くのほうでカラスが鳴いている。

「意味がわからないよ…じゃあ、また明日」

僕は急いで玄関を後にした。だから、夢野さんが最後に言った言葉は僕は聞くことができなかった。 きつとすぐにも悪夢が始まるわ

夕焼け色の空は、だんだんと闇の色を含み始めていた。春といえども夕方は寒い。寒い風が吹き、夢野さんのスカートをはためかした。

その夜のこと…

そこは真つ暗な空間だった。

風などの音は一切なく、生き物の気配も全くと言っていいほど感じない。そこはまるで墨汁で一面を染めたような深い黒だけが、この空間を形成しているようだった。

闇、やみ、ヤミしかない……

そんな空間に、僕はひとりでした。

この闇しかない空間の中でも、僕の姿ははっきりと浮かび上がっている。それはまるで僕自身から光を発しているようだった。

そんな僕は、何かに追われている最中だった。ときどき後ろを振り返りながら、全力で走っている。

僕の顔は恐怖でゆがみ、荒い呼吸を繰り返している。その呼吸音と足音だけが空間に響いている。そして振り返っては、自分を追ってきている何かを確認しようとするが、その姿を確認することはできない。

見えない何かに追われる恐怖が、僕を包み込んでいく。

しばらく走っていたが、僕は急に立ち止まった。体を前かがみにし、上下に肩を揺らしながら荒い呼吸を繰り返す。ハアハアという呼吸音だけが空間に響いているが、それもすぐに吸い込まれていき、再び静寂が訪れる。

しかし、その静寂を僕の声が打ち破る。

「一体誰なんだよ、追いかけてくるのは。もうやめてくれ」

僕は後ろを振り返って、そう叫ぶが返事は帰ってこない。僕の悲痛な叫びも容赦なく空間に吸い込まれていく。

僕自身も返事が返ってくるとは思っていない。しかし、叫ばずにはいられないほど恐怖を感じていた。気が付いたら真つ暗な空間に

いて、突然見えない何かが後ろにいるのを感じたのだ。誰だって恐怖を感じずにはいられないだろう。

僕はしばらく後ろを見つめていたが、何の変化もないことが分かった。あきらめた様子で再び視線を前に戻した。

そのとき、ふと誰かに見つめられている感覚を覚えた。その感覚は僕の立つ足元から感じるではないか。寄って僕の視線は、自然と足元にむけられる。しかし、何の変化もない。僕は気のせいかと思いい首をかしげる。そして、視線を戻そうとした瞬間、地面がゆがんだかのように見えた。

「な、何だ……」

僕は目をこすり、再び足元の地面に目を向ける。

すると、地面がぱっくりと割れ、二つの大きな赤い眼が現れ、こちらを見ているではないか。

「う、うわあ〜」

僕は驚き、腰を抜かし地面に座り込む。

その瞬間、地面にはたくさんの裂け目ができ、無数の眼が現れ始めた。そして、その裂け目は地面のみならず横や天井にもでき、多くの赤い眼が現れる。すると、いつせいに僕を見始めたではないか。多くの眼に見つめられ僕はどうすることもできないでいた。僕はこの恐怖の中で、どうすればいいか必死に考えたが、頭は回らない。何か身を守るものとあたりを見渡すが、もちろん何もなし。何か武器がほしいと願ったが、その願いがかなえられるわけもない。そして、たくさんの眼は、僕を変わず見つめ続けている。少し変わったところといえば、眼の数が先ほどより多くなったということだろうか。

言いようのない恐怖が僕を包み込んでいく。

僕は、その眼を見ないようにうつむきながらつぶやく。

「何か武器があれば…バットでもいい、何でもいいから助けて…」
そうつぶやいたときであった。

カランカラン……

何かが落ちる音を聞き、僕は顔をあげた。するとそこには一本のバットが落ちていてではないか。なぜと疑問に思い、目を丸くする僕だったが、そんな些細なことを気にしている場合ではない。

自分の身を守る武器を手に入れた僕は、心強い味方が現れたような気がした。そして、そのバットを両手で握り立ち向かうように構えた。

「うわあ〜」

僕は叫びながら、無我夢中でバットを振り回した。それに驚いた赤い眼たちは、その眼を丸くしているが、僕を見つめたままだ。僕も僕で、目を閉じたままバットを振り回しているので、当たるものも当たらずがない。

僕はしばらくバットを振り回していたが、何かに気付きその手を止めた。

コツコツコツ……

足音が闇の向こうから聞こえる。

僕はその方向をじっと凝視するが、何も見えてこない。

しかし、確実にその足音は大きくなっていく。

コツコツコツ……

足音は大きくなり、すぐそばまで迫っているのが分かる。

僕はその音がする方向をじっと見つめていると、人影が見えてきたではないか。そしてその人影は、こともあるうか僕に話しかけてきた。

「予想外のところに来てしまったようだ。だが、ある意味ラッキーだったのかもしれない。君みたいな人間に出会えたのだから。君は少し特殊のようだね」

人影は次第に大きくなり、その姿を現す。

黒いコートに黒いシルクハット、全身黒づくめの格好だ。顔は帽子を深くかぶってよく確認できないが、うすこけた頬が帽子の隙間から確認できる。

僕は気味の悪さを感じた。しかし、そんな僕にお構いなしに、その男はじわりじわりと距離を詰めてくる。

「君は何もない夢の中でバットを生み出した。それはすごいことなんだよ。分かるかな？君、本当に人間なのかな？不思議だね〜本当に不思議だ」

男は、僕が手にしているバットを指さしながら、興奮気味にそう告げた。

だが当に僕には、なにがすごいことなのか理解できないでいた。バットは僕自身が願ったら出てきたものだ。確かにすごいことなのかもしれないが、これは夢なのである。なにが起ったって不思議ではないはずだ。だから、男がそこまで興奮する理由が分からなかった。

「君にはその凄さが分からないか。残念だよ、まったく……」

首をかしげている僕に対して、男は嘆いた。

そして指を伸ばし、僕の眉間に当てた。

すると僕は指が当たった瞬間、体をびくつと揺らしたが、それっきり動くことができなくなった。僕はというと戸惑いの表情を浮かべている。僕は体を動かさそうと手足を動かしてみるが、先が少し動くだけで、それ以上は動かなかった。それを見た男は満足そうに口角をあげた。

「やはり君はとても素晴らしい。しかし私にとっては邪魔でしかないだろう。だからと言って君を殺すのはたやすいことだ。だが、殺したりはしまい。私は慈悲深いからなあ」

そう男が告げ、指を強く僕のほうに向かって押す。すると、そのまま僕は眠るように、目を閉じながら、後ろに倒れていったのだ。

そして、男は倒れた僕を見下ろしながら、こう告げた。

「ああ、言い忘れていたよ。ここで私に会ったことは忘れてもらえ
るとありがたいのだが…ふむ、もう聞いていないか。なら無理矢理
でも忘れてもらうしかないね。まだ、あいつらに気付かれるのはま
ずいからね」

男はこういうと、腰をかがめ、倒れている僕の眉間に再び指をあ
てる。すると僕の体は、先ほどと同じように一瞬びくくと揺れたが、
その後はまるで何事もなかったかのように床に横たわっている。

その様子を見た男は、満足そうに笑みを浮かべながら僕を見下ろ
している。

「これでいい。ふふふふふふふふ……」

そして、男は踵を返し、笑い声とともに暗い空間に消えていった
のだった。

僕はベッドからび起きた。

全身から汗が噴き出しているのが分かる。そして、その汗が次第に冷え、全身の体温を奪っていく。寒気を覚え、自分の肩を抱き、身を縮める。

しかし、その寒気はおさまることはなかった。僕自身、この震えが寒さだけによるものではないことを、一番よくわかっていた。

起きた時に跳ね飛ばした布団を、自分の肩まで手繰り寄せる。そして、落ち着こうとゆっくりと深く呼吸をする。深呼吸は僕をある程度、落ち着かせてくれた。

僕はあたりを見渡す。薄暗いがそこはよく知っている自分の部屋だった。教科書が山積みになっている勉強机に、マンガが並んでいる本棚、どこも変わったところはない。いつもの自分の部屋にいることが分かり、ホッと胸をなでおろす。

カーテンの隙間からは朝の日差しが漏れている。加えて、チュンチュンと小鳥の鳴き声が窓越しに聞こえてくる。こういうのを清々しい朝というのだろうが、今の僕の状態ではその清々しさを感じる余裕はなかった。

何だったんだ、あの夢。すごくリアルだった……

僕は先ほどまで見ていた夢を思い出す。思い出しただけで身震いするほど怖い夢ではあった。しかし、高校生にもなって、怖い夢の一つや二つでここまで怖がる自分もどうかと思うが。それでも、ただの怖い夢とは根本的に違う何かを感じたのだ。

僕は気を取り直し、今何時だろうと疑問に思い、目覚まし時計を探す。

目覚まし時計がさしていたのは六時前だった。

さすがに二度寝するには遅い時間であり、起きるには少し早すぎ

るような、そんな微妙な時間帯であった。ただ、あんな怖い夢を見た後では、どうも、もう一度寝ようという気にはならず、起きることにした。

怖い夢を見た、そのせいで目が覚めるなんて、幼稚園のころ以来ではないかとそう考えながら僕は一階へと降りていく。

一階では母さんが台所に立ち、朝食の準備をしていた。

包丁がリズムカルにまな板をたたく音がリビングに響き、みそ汁の優しい香りが部屋全体に広がっている。

その音と香りは僕の気持ち落ち着かせてくれた。

「あら、おはよう、いつき。どうしたの？いつもよりだいぶ早いけど……いつもはもうちょっと寝ているくせに。今日、何かあるの？」

母さんは、僕のいつもよりもだいぶ早い起床に驚いている。そこまで驚かなくていいだろうに、僕がどれほど寝坊の常習犯が分かるではないか。

「ああ、おはよう。ちょっと怖い夢を見たからさ、いつもより早く目が覚めちゃったんだ」

「怖い夢って……小さい子じゃないんだから。高校生にもなっって何言っているの。お母さん、本当に恥ずかしいわ」

「大人だっって怖い夢ぐらい見るだろ。年齢関係ないと思うんだ・けど！」

「……ダサイんだけど」

自分でも恥ずかしいかと思いつつも必死に母さんに応戦している最中、まるで水を差すような生意気な声が僕の後ろから聞こえてきた。僕は声の主が誰なのか分かっていて、込み上げてくる怒りを抑えながら後ろを振り向くと、そこには、ダイニングで椅子にすわり、朝食ができるのを悠然と待っている妹の姿があった。

名前は高原なぎ。小学校四年生だ。髪を横に束ねているが、兄弟げんかのとき、それは凶器にもなる。口も達者で本当に生意気な小学生だ。年の差もあり、今のところ兄妹げんかの成績は全敗である。でもこれはお兄ちゃんとして当然だろう。小学生相手に本気になっ

たら、本当に大人げないではないか。

「本当にダサイよね〜うちのお兄ちゃん。マキちゃんのお兄ちゃん
はかっこいいのに……」

「マキちゃんのお兄ちゃんは知らないが、僕だって十分かっこいい
お兄ちゃんだろうが」

「寝言は寝てから、言ってほしいな」

「なんだと」

「朝っぱらからやめなさい」

母さんの怒号が台所から聞こえる。水を差されたので妹との口げんか
はここで終了となった。世の中には妹萌え〜とかがあるらしいが、そんなもの
幻想だ。マキちゃんのお兄ちゃんがどれほどのものは知らないが、僕はマキ
ちゃんが妹だったらと思う……こんな妹はいらない……

そんなやり取りをしていると父さんが起きてきた。さつさとみんなに朝の挨拶を
すませると席に着いた。うちの父さんは、寡黙な人なので、いつもこんな感じでは
ある。そしてダイニングには家族全員集合となった。

家族全員がそろい、みんな朝食を食べ始めた。

これが、我が家のいつもの光景なのだ。

そんないつもの日常が始まった途端に、僕の頭の中からは、朝のあの悪夢のこと
なんて、きれいさっぱりとまでは言わなくても、気にはならない程度にはなっ
ていたのだった。

そして、朝食を食べ終えた僕は学校へと向かう。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

母さんの優しい声が、天気の良い朝の中元気に響いたのだった。

学校に着き、教室に入るとみんなの視線が僕に集まった。昨日の今日だから仕方がないと思いつつも自分の席に着く。後ろの席を見ると、夢野さんはまだ来ていなかった。そつと胸をなでおろす。

隣の席を見ると川島くんが、きれいな姿勢で席に着いていた。窓からは朝の陽射しが入り込んでいた。その春の陽射しが僕たちの席に降り注いでいる。しかし、そんな日差しを浴びている川島くんの顔は、やはり昨日と同じ青白かった。春の陽射しは川島くんの頬を暖かく染めることもできないでいた。川島くん自身からは、すべてを拒絶しているかのような空気を醸し出していた。

僕は恐る恐る川島くんに声をかけてみる。

「大丈夫？川島くん」

川島くんがこちらを振り返る。僕を見つめる瞳は、何ものも映ってはいなかった。そこには魂がないように見えた。本当にそれは空虚な瞳だった。僕はその目を見て怖くなった。いつもの川島くんは、無口だが芯のしっかりした人だった。その目も、口にはしないが夢や希望にあふれた高校生の目をしていて、それが今はどうだ。こんなにも空っぽになってしまった。一体、何がどうなってこんなことになったのだろうか。僕には見当もつかなかった。目は口ほどにものを言うつというようなことを聞いたことがあるが、それならば今の川島くんは、空っぽということになっていしまう。僕はどうしても信じられなかった。

僕はしばらくその瞳を見つめながら絶句していた。どれくらい時間が過ぎただろうか、それは一瞬のことだったに違いないが、とても長く感じられた。

「ああ、大丈夫」

川島くんが絞り出すような声で答えてくれるまで、僕は目をそら

せずにいた。その声を聞き我に返った僕は、ほかに言葉が出なかった。そのまま席に着いた。しかし僕の心の中は、恐怖と心配と疑念でわけのわからない状態となっていた。

そんな中、誰かが席に近づいてくる音がした。音の主は夢野さんだった。澄ました表情で自分の席に座る。その途端周りがかやがやと騒がしくなる。しかし、当の本人は知っていか知らずか何事もないうちに授業の準備をし始めている。どうやら僕に対して関心がなくなっただのか、何も言うてはこない。そこにホッとすする僕だった。

川島くんの件といい、夢野さんの件といい、僕を悩ます種が多すぎるような気もするが、気のせいだろうか。そして悩みの種がもう一つ……

「おっはっよう〜いつき〜」

龍臣の登場だ。朝からハイテンションである。いいやつなんだけど、朝からこのテンションにはついていけないところがある。

「朝から元気だね、龍臣は」

「もう元気モリモリよ〜それより川島は昨日にも増して顔色悪いなあ。大丈夫か？」

そう言っつて龍臣は川島くんの顔を覗き込む。すると、龍臣は彼の顔を見てぎよつとした。龍臣も気づいたのだらう、あの空虚な瞳に。

「お前…まさか…」

龍臣の顔が一瞬で、さっきのチャライ感じだったのがまじめな顔つきになる。まじめな龍臣などあまり見たことがないので、僕は少し驚いた。そんな龍臣は、何かを考えるような仕草のまま無言で自分の席に戻っていった。僕は驚きつつも龍臣を目で追うが、難しい顔で何かを考えているようだった。そんな姿を今まで見たことがなかった。それで心配になった。一体何が彼をそうしたのだろうか。僕は再び川島君のほうを見るが、そこには朝と同じ青白い顔で前を見つめている姿があるだけだった……

先生が教室に入ってきた。授業が始まる。

先生が何かを一生懸命話しているが、今の僕にはあまり耳に入
てこなかった。龍臣のほうを見ると、先ほどと同じ難しい顔をして
考え込んでいるし、川島くんは顔色が悪いし、何が何だか僕は分か
らないでいた。そのわからなさか僕を不安にさせる。

「川島、次のところを読んでくれ」

先生か川島くんをあてた。他のことを考えていた僕はその声で我
に返り、川島くんのほうを見つめる。大丈夫なのだろうか心配す
る。

「…はい…」

川島くんはゆっくりと立ち上がった。しかし、完全に立ち上がる
前にその体はぐらりと揺れ、倒れるまではいかなかったが、そのま
ましゃがみこんでしまった。女子たちからは悲鳴が上がり、男子た
ちはどうしたのかと半立ちになって川島くんのほうを見つめている。

「大丈夫、川島くん！」

「大丈夫か、川島」

僕は急いで川島くんに駆け寄った。先生も心配そうに駆け寄って
くる。僕は、川島くんの背中をさすりながら、何度も大丈夫？と声
をかけた。するとか細い声で大丈夫だと答えてくれたが全然大丈夫
そうに見えなかった。

「先生。川島くんを保健室に連れて行ってもいいですか？」

「ああ、いいぞ」

僕は先生に許可を得て、川島くんを保健室に連れて行くこととした。
川島くんは立ち上がるのもつらそうだった。僕は川島くんの腕を首
に回し、肩を貸した。そうして立ち上がり、教室を出た。後ろから
は心配する女子たちの声が聞こえてきた。そんな僕たちの後ろ姿を
夢野さんは無表情で見つめていた。そして龍臣はやっぱりなとつぶ
やいたのだった。そのつぶやきは僕たちには聞こえなかったのだが…
保健室へ行くため廊下を歩いていると、川島くんがうわごとのよ
うにつぶやいた。

「夢が…悪夢が…」

「え、なに？」

僕は聞き返すが、それっきり川島くんは気が失ったかのように一言も発することはなかった。

保健室にたどり着いた。

保健室は教室とほぼ同じ大きさだった。入ってすぐの左に先生の机と本棚とソファが並び、右には視力検査に使う物や身長をはかる器具などが置いてある。奥には今はカーテンで仕切られているが、ベッドが三つ置かれている。

「病人かい？」

そこにいたのは新しい男の先生だった。確か名前は夢野先生だ。夢野先生はきつちりと白衣を着て、優しくそうな笑顔で迎えてくれた。見た目はとても若く、大学生といっても通るだろう。さわやかな感じで、女子の間できつと人気になるだろう。

「急に倒れて…昨日から顔色も悪かったんです」

「そう。じゃあ、そのソファに横になってもらえるかな。あいにくベッドが全部、埋まっているんだよ。ごめんね」

「そうなんですか」

僕は先生に言われたとおり、川島くんをソファの上を下ろした。

川島くんはそのまま力が抜けているように横になってしまった。それを見た僕は、本当に具合が悪いんだと改めて実感した。先生に毛布を借りて、上にかけてあげる。

「川島くんは大丈夫でしょうか？」

「貧血かな？それとも疲れがたまっているのかな？」

そう言い先生は川島くんの顔を覗き込む。すると、先生の顔が陰しくなった。僕は心配になり声をかける。

「どうかしましたか？」

声をかけると、先生の顔は一瞬で元の優しい顔に戻っていた。僕の見間違いだっただらうか。

「いや、なんでもないよ。それより、君の名前は？そして何組かな

？」

「二年三組の高原いつきです」

「そうか、僕の妹と同じクラスか。妹、どうしている？クラスには馴染めたかな？」

「妹って…夢野さんのお兄さんなんですか？…そうか同じ苗字ですものね。気付かなかった。夢野さんは…友達を作るのが苦手なのかどうか知りませんが、だれとも話したりしませんね。あの美貌だから、周りも声をかけづらいというのがありますし…で、でも悪い人じゃないですよね」

「ははは、フオローはいいよ。兄だからあいつのことはよくわかっているつもりだから。そっか、なじめてないか…高原くん、妹のこと頼むよ。仲良くしてやってね。本当は優しくていい子だから」

「…わ、わかりました」

夢野さんとの初日の出会いは最悪だった。あれがなければ仲良くできただろうか。いや、あれがなかったら僕はきつと夢野さんとは口をきくこともなかっただろうと思う。そう思うとよかったのかもしれない。お兄さんに言われたからではなく、夢野さんとは仲良くできたらいいなと思うし、彼女には聞きたいことがたくさんある。今度聞いてみようと思った時、ふと疑問に思ったことがあった。

「先生、今日はベッドがいつぱいって、そんなにも体調の悪い人がいるんですか？」

「今日は特別だよ。いつもは一人二人なんだけどね…朝すぐに保健室に運ばれてきてね。しかも一斉に三人運ばれてきたんだ。そして偶然なのかもしれないけれど、みんな一年五組の女生徒なんだ。きつと偶然だろうけどね」

「はあ、そうなんですか。それはきつと偶然ですよ。あ、川島くんのことよろしく願います」

「わかりました」

僕は、保健室を後にした。

放課後は僕一人だった。

龍臣は難しい顔のまま、僕に何も言わずに一人ですたすたと帰ってしまった。

僕はひとりさみしく帰ろうと、靴を履き替える。すると自分の横に気配を感じ、見てみるとそこには夢野さんが立っていた。

「また、僕に用？」

「いいえ」

僕は靴を履き替えている夢野さんを見つめる。そして、彼女に聞きたいことがあるのを思い出す。僕は意を決して彼女に尋ねてみた。

「夢野さん、聞きたいことがあるんだけど…」

「…何かしら？」

「僕に対して同じ匂いがするって言ったけどどういう意味？」

夢野さんは僕をじっと見つめ返す。その瞳はきれいな黒色で、まるで吸い込まれそうなほど澄んでいた。見つめられていると心の奥まで見つめられているようで、僕はたまらず目をそらす。しばらく沈黙が続いた。

「…その意味をまだ答えたくないわ。それに今は答える時期ではないわ」

「どういふこと？」

「……」

「…あのねえ、夢野さん、いいかげんに…」

夢野さんと話すと、疑問ばかりが募る一方だ。会話が成立しないというか、一方的に話しかけてきて、こちらから質問すると答えを言ってくれない。そんな夢野さんにイライラが募るのは僕だけだろうか。

「あれ？高原さんと夢野さん。今帰るところ？」

そこには雨宮さんと川島くんが立っていた。イライラしていた僕は、いまにも夢野さんに文句の一つぐらい言おうとしていた時だった。タイミング良く二人が現れたため、僕の怒りゲージはおさまりを見せた。

自分の気持ちを落ち着かせ、僕は二人に駆け寄る。

「二人でどうしたの？」

「たまたま廊下でばったり会ったの」

「そうなんだ、川島くんは大丈夫？朝よりは顔色良くなったね」

「ああ、ありがとう。保健室に運んでくれて」

「いいよ、それくらい」

「ねえそれより、みんなで帰らない？夢野さんも」

雨宮さんは僕の後ろにいる夢野さんに声をかけた。夢野さんはこくりとうなずいた。まさか彼女がオーケーするとは思わなかったのだ、内心驚いたが、いい傾向だと思った。教室では誰と話さない彼女だから、こうやって誰かと一緒に帰ることはとてもいいことだと思う。きつとお兄さんの夢野先生も喜ぶだろう。

外はだいぶ日が落ちてきた。部活動をする生徒の音が響いている。その中を僕たちはゆっくりと固まって歩き出した。

最初はみんなだんまり状態だった。なかなかこのメンバーで帰ることがないので、話す話題もどうしていいか、お互い分からないでいた。しかし、この沈黙を意外な人物が破った。川島くんだ。あの無口で寡黙な川島くんが、だ。

「…悪魔っているのかな？」

最初はみんな、何を言っているのか理解できないでいた。それはあまりにも突拍子のないことだった。

「いきなりどうしたの？」

僕は川島君に聞き返す。すると真面目な顔で彼は同じ言葉をつぶやいた。

「…悪魔っているのかな？」

「悪魔は実在しないよ。人が作り出した空想の生き物だよ。そうだよね、雨宮さん」

「いるかもしれないよ」

「どういうこと？雨宮さん」

すると雨宮さんは、大真面目に話し始めた。

「私、こう見えてオカルトにすごく興味があるの。科学では解明できないことがこの世の中にはたくさんあると思う。悪魔もその一つで、現にバチカンでは今でも悪魔払いを行っていると言われているし」

「雨宮さん…」

「う、ごめんなさい。確証があるわけじゃないものね…」

「いや、いいんだよ。趣味は人それぞれだから」

「…悪魔はいるわ」

夢野さんがぼそりとつぶやいた。その声はとても小さかったのだけれど、はつきりと聞こえた。僕には、その言葉から何だか確証め

いたものが感じられた。そう、まるで悪魔を見たことがあるかのような、そんな感じが…

何だかんかんだ本当に今日は疲れた。今日は本当にいろいろあったと思う。川島くんが倒れるわ、夢野さんと一緒に帰ることになるわ、大変な一日であった。そう思うと家に着いた途端、どっと疲れが押し寄せてきた。

「ただいま」

リビングに入るとそこには妹のなぎがいた。つまらなそうにソファの上でごろごろしている。なぎは帰ってきた僕に気付いたのか、こちらのほうを振り向き、けだるそうな視線を送ってくる。

「おかえり」

その声も本当にけだるそうだ。まだ小学生のくせにその態度はいかがなものかと思う。

「何、ごろごろしてるんだよ。小学生はもっと活動的じゃないとダメだろ」

「なにしようよと私の勝手でしょ。お兄ちゃんこそ顔色悪いよ。学校で何かあった？」

「いろいろあった」

「ふ〜ん……」

そこで僕たち兄妹の会話は終わった。年の離れた兄妹の会話などこんなものだろう。

しかし、妹に顔色の悪さを指摘されてしまったではないか。そんなにひどいのだろうか。そう思うと余計に疲れが増し、自分自身病人のように思えてきた。病は気から、まさしくそんな感じ。

僕は台所にいる母さんに声をかける。あたかも病人のごとく。

「母さん、体調悪いからご飯はいいや。先寝るよ」

「大丈夫なの？」

「寝たら治るよ、きつと」

そう言っ僕は自分の部屋に上がった。

部屋の扉を閉めると気が緩んだのか、ずるずると座り込んでしまった。

大したことをしたわけではないのに、こんなことで疲れている自分もどうかと思う。川島くんのがうつったのかなと思いつつ、だからと座り込んでいるわけにはいかないので、僕は這いつくばるようにベッドへと移動を開始した。その様子はきつと何かの不思議生命体に見えるだろう。

ベッドにようやくたどり着き、潜り込んだ。ひんやりとシーツの温度が伝わってくる。そのひんやり感に気持ちよさを覚えながら、僕は寝る態勢に入った。

だが、なぜか急に違和感というかなんというか、言葉には表せないもやもやとした気持ちを押し寄せてきた。まるで、眠ることを体が拒否しているかのようなそんな感じ。

僕はその感覚に戸惑いながらも、気のせいだと言い聞かせる。

しばらくの間、ベッドの中で寝つけずにいた。だが、やはり疲れていたであろう、自分でも気付かないまま、眠りに入ってしまった。次に目が覚めるときは、必ずと言っていいほど明日を迎えるものである。

しかし、そうじゃないこともあることを僕は知ったのだった。

そして、目が覚めた。

しかし、そこは自分の部屋ではなかった。

いつもあるものがなく、ないものがある空間。見覚えのある光景。闇がそこにはあったのだった。

「どうして…またなのか……」

呆然とする僕。同じ景色を再び見ようとは、だれが思ったであろうか。

今朝見た夢が、再び僕のもとに現れた。

「同じ夢を見るなんて……」

二度も同じ夢を見ることはありうるのだろうか。それは、僕の今までの人生の中では一度もなかったことである。無いわけではないのだろうが、気味が悪い。ただそれだけだ。

僕はずっと立っているわけにもいかず、歩き始めた。

どこに行こうとも、この闇しかない空間ではどうすることもできない。でも、同じ場所にとどまることだけは嫌だった。僕はひたすら歩き続けた。止まったら終わりだとも言うように。

しかし、歩いても終わりの見えない空間に、僕はめまいさえ覚えた。自分が小さく、無力に思えてならなかった。自然と足は止まっていく……

すると、誰かの気配を感じた。誰だと思い、その人物がいるだろうと思う場所に目をやる。だんだんとその人物が近付いてくる。そして僕はあつと声をあげた。そこにいたのはよく知る人物だった。

「よ、いつき。こんばんは」

そこにいたのは龍臣だった。龍臣はパジャマ姿でこちらに近寄ってきた。ニコニコと満面の笑みだった。

「ど、どうして、ここに龍臣がいるの？」

「どうしてって夢の中だから、別にいたっておかしくないだろう」「確かに夢のなかなのだから何が起こってもおかしくはない。夢とはそういうものだろう。夢の中ではいろんなことが起きる。空を飛んだり、悪者をやっつけたり、ありえないことが当たり前のように起きている。それが夢だ。だから友達が現れるなど、夢の中ではありきたりなほうだろう。しかし、僕は龍臣を目の前にして、どこか違和感があるように思えてならなかった。その違和感がどこからくるものなのか、説明することはできないのだけれど。

「ちよつと様子を見に来ただけど…うくん、やばいなあ。川島のほうに行きたかったんだけど行けなくてさあ。やっぱり、何かあるよ絶対」

「どういうこと？」

「こつちの話」

龍臣はきよるきよるしながら、こちらに近づいてきた。そして僕に真面目な顔で話しかけてきた。

「気をつけたほうがいいぞ。この夢は悪夢だ。俺的には、早く目覚めるほうをお勧めするよ」

「悪夢って…川島くんも言っていたような気がする。悪夢を見たって……」

「…そうか、やっぱり…」

考え込む龍臣。心配そうにそれを見つめる僕。静寂がふたりを包む。口火を切ったのは龍臣だった。

「ハア、考えても無駄か…俺の手が出せることではないしな〜ハア、いつき、帰るよ。突然来て悪かったな」

「う、うん。それはいいんだけど…」

そう言うと龍臣は踵を返し、再び暗い闇の中に消えていった。僕は一体何が起こったのか、という風に呆然と龍臣が返って言った方向を見つめていた。まるで嵐が過ぎ去ったあとのようだった。

しばらく呆然としていたが、見つめていた方向の空間が揺れたように思えた。

目覚めは最悪だった。

朝、目が覚めた時、まるで重労働したかのごとく疲れがどつとたまっていた。あんな夢を見たのだから仕方がないのかもしれないが、本当に最悪だった。寝た気が全くしない。

そんな重い体を引きずりながら、学校に行かなくてはならないのは本当に辛いものがある。しかし、学校に行くのが学生の仕事だ。それに体がだるい程度では、母さんは学校を休ませてくれない。あいにく熱はなさそうだ。重い体を引きずり、一階に降りる。

「大丈夫なの？」

母さんが心配そうに声をかける。昨日の今日だからなおさらだろう。

「大丈夫だよ」

「熱はないの？今日学校休んだら？」

思いがけない言葉に僕は反応する。あの母さんがそう言うぐらいだから、今の僕の姿は本当にひどいものなのだろう。

「いや、いいよ。時間無いからもう行くよ。いつてきます」

僕はそう言い、朝ごはんも食べずに学校に向かった。ここで休めないのが僕である。熱もないのに休むと罪悪感が生じる、いわゆる根性無しである。

僕は教室にようやくたどり着き、その重いドアを開ける。自分の席に向かう途中、自分の後ろの席を確認する。夢野さんはまだ学校には来ていない。

自分の席に座り、一時間目の準備を始める。すると、教室の前のほうで話している、ある女子グループの話が耳に入ってきた。

「ねえ、聞いてよ。今日さ、へんな夢を見たんだよね」

「へえ〜どんな夢？」

「それがね、真っ暗な部屋にいるの。何もなくて、本当にただの暗い部屋？しばらく歩いていたんだけどね、やっぱり何も無くてね。すると、いきなり大きな眼が目の前に現れたの。ものすごく大きくて、赤い眼をしていて気持ち悪いんだよ、これが。そしたら、その眼に見つめられてるの、ギョロツとね。それから眼が覚めたんだけどさ。なんか怖かったよ」

「へえ〜災難だったね。でもさ、そんな夢よく見るよ」

「そうだよねえ〜」

僕は自分の耳を疑った。今、彼女が話した夢の内容は、まるっきり自分が見たのと同じではないか。僕が驚いていると、その話を聞いていたある男子が話に割り込んできた。

「その夢、俺も見たよ。暗い部屋で大きな眼が現れるんだろ。見た見た、それ」

「うそ〜そんなことってある？」

「いや、マジだって。本当に見たんだよ」

そんな会話がなされていると、また話を聞いていたほかの男子が話に割り込んでくる。

「それ、僕も見たよ」

「うそ〜」

それを皮切りに、たくさんのクラスメイトが、自分も見たと言い始めたではないか。

それはまるで連鎖反応のように次から次へと。

「僕も見た」

「私も〜」

「俺も、俺も」

そんな光景に僕は、気味の悪さを覚えた。同じ夢をこんなにたくさんの方が見ることは、果してあるのだろうか。

僕は、自分も同じ夢を見たとは言えずに、ただただその光景を眺めていた。クラスメイトのみんなは何も考えずに、今の状況を面白

がっている。しかし、僕にとっては面白くもなんともない。ただただ、不気味なだけである。不思議で、そして不気味だ。

気がつく、後ろの席に夢野さんが座っていた。

あの騒ぎに気を取られて気がつかなかった。

夢野さんのほうをちらつと見る。すると、その視線は教室前で盛り上がっている集団にむけられている。同じ夢を見て、騒いでいる集団にだ。よく見るとその視線には軽蔑と意が込められているような気がした。そしてその表情は怒っているような感じである。これらは僕の推測ではない。会ったばかりの女の子の表情なんて、そうそう、読み取れるものではないのだから。

ガタン！

突然、何かが倒れる音がした。みんなの視線が音のした方向にむけられる。その音は自分の近くでなったものだと分かり、あたりを見渡す。すると隣の席の川島くんのイスが倒れていた。見ると、川島くんは立ち上がった。きつと立ち上がった時に倒れたのだろう。僕は川島くんのほうを見ると、彼は驚き青ざめていた。そして僕が声をかけようとした瞬間、川島くんはまるで逃げるように教室を飛び出していった。周りは何が起こったのか理解できずに、ただただ川島くんの席を見つめていたのだった。

そんな騒ぎのあった朝から、僕は自分の見た夢についてずっと考えている。あの暗い空間に大きな赤い眼たち。何を意味して、何を伝えたいのか。そんなことを考えてはいたが、答えが出るはずもなく、ただ何かを忘れているような気がしたただけだった。しかも、忘れていたことがなになのかも答えは出なかった。

放課後、たまたま雨宮さんと帰りが一緒になった。龍臣は昨日と同じく何も言わずに帰ったようだし、川島くんは朝出ていったきり帰ってこなかったのだ。

もちろん話すことは今日に朝の出来事である。頭の良い雨宮さんが、今回のことをどう思っているのかは大変気になるものである。

「朝の出来事覚えてる？ たくさんの人が同じ夢を見たってやつ」

「ああ、あの朝、騒いでたやつだよ。あれは不思議だったね。みんながみんな、同じ夢を見たって騒いでたよね」

「あれどう思う？ 本当にこんなことってありうるのかな？ だってみんながみんな、同じ夢を見るなんてありえないよ」

「でも、そんなありえないことが実際起こっているのだから、ありえないことじゃなくなっているよね。聞いた話によるとね、その夢、ほかのクラスでも見ている子がたくさんいるみたいなの」

「うそでしょ……」

「本当だよ。だからありえないことではないんだよ、もう」

ありえないことではなくなっている。確かにそうかもしれない。

ありえないことでも起きてしまえばありうることになるんだ。しかし、今の状況は本当に気味が悪い。

「…夢って何なんだ…なんかすごく怖くなってきたよ」

僕は不安げにぼそっとつぶやく。今までは夢を見ることに何の抵抗もなかったし、見て当たり前だと思っていた。それでも今は違う。今は夢を見ることが怖かった。それに、今まで生きてきた中で、これほどまでに夢について考えたことがあっただろうか。

夢、ゆめ、ユメ……

僕の頭は混乱してきた。

「夢とは、睡眠中にもつ幻覚。ふつと目覚めた後に意識される。多

くは視覚的な性質を帯びるが、聴覚・味覚・運動感覚に関係するものもある。広辞苑第六版より」

雨宮さんは夢とは何だという心の底から出てきた僕の質問に対してそう淡々と告げた。というか、広辞苑の内容を覚えていていいのかこの人は。それはそれで恐ろしい。

「…ありがとう、よくわかったよ」

「いいえ、どういたしまして」

笑顔の雨宮さんに、僕は苦笑いで返す。

「高原くん、夢ってね、いまだ説明されていない現象なんだよ。私としたらこのまま説明されないでほしいかな。そのほうが夢があるっていうか、夢だけにね」

「…別にうまいこと言っていないよ、雨宮さん」

「そうだね、ごめん」

少し照れている雨宮さん。それを挽回することく雨宮さんは、真剣身を帯びた表情で話し始める。

「あ、それでね、夢のことなんだけど、私が聞いた話によると、夢は浅い眠りに陥るレム睡眠に見るとされていてね、深い眠りのノンレム睡眠時には発現されないと考えられていたの。でも、最近ではノンレム睡眠時でも夢を見ることが確認されているんだって。

それにね、夢を見る理由については現在のところ不明なんだって。でも、夢の存在意義として言われている説には、無意味な情報を捨て去る際に知覚される現象であるという説と、必要な情報を忘れないようにする活動の際に知覚される現象である説の二つが有力とされているんだって」

「へえ〜」

「本当に夢って不思議だよな」

僕は夢の摩訶不思議よりも、雨宮さんの知識に感心してしまった。やはり学年トップはどこか違う。

「雨宮さんはいろんなこと、よく知っているよね」

「たまたまだよ」

そう言いのける雨宮さんに僕は感嘆のため息を漏らす。やはり超人か、雨宮美雨。

「本当はその夢、僕も見ているんだよね……」

「そうなの！？それは、不安だよね……」

「うん……気味が悪いよ、本当に」

そんなこんなで話しこんでしまい、時間もあつという間に過ぎた。そして、分かれ道に入り、僕は雨宮さんと別れることとなった。

これは僕の知らないもう一つの放課後の風景。

そこは学校の屋上だった、そこに二つの影がある。本来なら学校の屋上は立ち入り禁止となっている。どうやってこの二人が入ったかは定かではないが、秘密の話をするにはうってつけの場所であることは間違いない。

「だ・か・ら俺じゃないよ。だからそんな目で見ないでよ」

影の一つが大きな声で何かを否定している。もう一つの影は微動だにしない。

「やめてよね、夢野さん、俺を疑うの」

影の一つである夢野夢子は、相手をまっすぐ見つめている。その目は俗に言う、疑いのまなざしであった。表情に乏しい夢子からことう読み取れるのだから、本当にその相手を一点の曇りなく疑っているのだろう。もう一つの影はそのままなざしにたじろぎながらも、強く弁解する。

「本当に俺じゃないって。分かっているでしょ、俺の正体も立場も」

「ええ、わかっているわ」

「だったら俺じゃないことは分かるはずだよね」

「念のために聞いておきたかっただけよ、瀬田龍臣」

「それにしても、疑っているよね」

疑われているもう一つの影である龍臣は、大きくため息をつく。

疑われても仕方がない自分の立場を考えると、夢子のこの行動は決して間違っていない。間違っていないがやりきれない思いを感じる

龍臣だった。

「それにしても、俺じゃないことはそっちのほうがよくわかってい
るはずだけど。だよ、俺を監視している夢管理委員会のメンバ
ーの夢野さん」

「……」

「だんまりはいけないよ、夢野さん。こんなことをしている間にも
被害は拡大するぞ。犯人はほかにいる、それだけは間違いないこと
だ」

屋上なので風が強く吹く。その風は冷たく龍臣は首をすぼめる。

夢子の絹のような黒髪が風で舞い上がっている。しばらくの間、沈
黙が続いた。

「分かっているわ、今夜中にでも犯人を見つけるわ」

そう言っつて夢子は屋上を出ていった。一人取り残された龍臣はフ
ェンスに体を預け、空を見上げる。空は夕焼けに染まり、黒い雲が
まだらに浮かんで、きれいなコントラストだった。

「はあくいつきは大丈夫かな?…」

龍臣のつぶやきは、だれもいない屋上に静かに消えていったのだ
った。

これで三度目だ。

さすがの僕もここまでくると慣れてくる。

慣れもするし、飽きてもくる。

僕は、すっかりおなじみのあの暗い空間の中にいた。

「はあ〜またか……」

ため息もつきたくなる。

雨宮さんと別れてから、まっすぐ家に帰った。あんまり遅くなる
となぎが心配するからだ。なぎは、いつもは生意気だが、かわいい
ところもあるのである。前に寄り道をして、帰りが遅くなったとき
は、涙目で迎えてくれたこともあった。そんなこともあり、あまり
遅くならないように心がけている。だからこの日もまっすぐ帰った。
あとはいつも通りの生活だ。家族と食事をして、なぎと言い合い
をして、お風呂に入って、あとは寝る。勉強は？と聞かれても、そ
こはスルーしてくれるとありがたい。

そう、いつも通り寝たのである。しかし、朝の学校の件もある。
嫌な予感がしなかったわけではない。でも気にしていてもきりがな
いので、普通にベッドに入って寝たのだ。最初は寝付けなかったが、
それでもがんばって寝たのだ。

そして、その結果がこれだった。

「はあ〜」

先ほどから何度ため息をついたか分からない。ため息をつく前に
怖がるのが普通なのかもしれないが、僕自身このとき、何の恐怖も
感じていなかった。こうなることが分かっていたかのように。でも、
僕はこの時、気づくべきだったのかもしれない。いつもと違う雰囲気
にだ。

「仕方ない、歩くか。まあ、歩いていつもと同じように何も無い

んだらうけど……それにどうせ、またあの赤い眼が現れるんだらうな」

僕は分かりきったような口調でそう言い切り、歩み始めた。

歩きながら僕は考えていた、この夢をほかの人も見ているんだらうなと。そう思うと、なぜか歯がゆい気持ちになった。ほかの人と同じ夢を見るのは、どこか気持ち悪いものがある。夢というのは、すぐくプライベートなもののように僕は思う。だから、夢を話のネタにする人の気持ちが分からない。

夢の内容を話すことで、僕自身の内側をさらしているような感覚になるからだ。世の中には夢占いというものがある。見た夢の内容で、その人の深層心理が分かるというやつだ。だから、僕のこの考えは、あながち間違っではないのかもしれない。でも多くの人はこういっだらう、考えすぎだと。

兩宮さんとも話したが、夢とは不思議なものだ。本当に心からそう思う。今こういう状態になっているから、ますますそう思ってしまう。

こうやって考えながら歩いていると、人は当然ながら周りに目がいなくなるものである。それは僕も例外ではない。

「あれ？何かいる……」

僕は目の前に何かを見つけた。

しかし、この暗いなかではつきりと確認することは不可能だった。だから何かあると言っても、視覚で見つけたというよりは感覚で見つけたというほうが正しい。周りを流れる雰囲気は目の前に何かあることを物語っていた。

「なんだらう。今まで何もなかったのに。それに今日はあの赤い眼が出てこない」

僕は慎重に、慎重に、歩を進める。

でも、僕は間違っていたのだ。ここで前に進まず逃げればよかったのだ。いや、逃げたとしても、ここではどこに逃げようと同じだったかもしれない。

慎重に歩を進めていた僕は、何かにぶつかった。

「痛つ、なんだ？」

僕はぶつかつた額をなでながら、ゆつくりと顔をあげる。
固まつた。

僕の動きは止まつた。完全なる静止。

自分の目を疑つた。

そこにいたのは、黒い大きな影。この暗い空間でも浮かび上がり、その存在感を示す。その形は二メートルを超す大男のようないでたち、手には大きな斧らしきものが握られていた。さらに驚きなのはその頭はオオカミのような獣の形をしていた。例えるならそれはエジプトの神で頭は獣、体は人間のあの神に似ていた。

僕の思考は完全に停止してしまつた。自分が見ているものが信じられなかつた。だが、次の瞬間、僕は我に返つた。この影が声を發したのだ。獣の口から洩れる声は低く、体の芯に響くものだった。

『ご主人様の命令どうりに』

一体どういう意味なのか、僕には理解できなかつた。でも、本能でやばいことが分かつた。逃げなくてはと思つたが、今頃になつて状況を理解し怖くなつたのか、足が震えて動かない。動けと命じても足は動いてくれそうもない。

そんな動かない僕に、影は手に握つてある斧を振りおろそうとしているのではないか。絶体絶命である。夢の中とは言え、殺されるのはごめんだ。でも夢の中だから、殺されても大丈夫のように思えるが、僕自身そんなことを考えている余裕はない。普通ならここで目が覚めそうなものだが、そうはいかないらしい。

斧が振り下ろされる。まっすぐ勢い良く、僕に向かって。

僕は目をつぶつた。

.....
どれくらい目をつぶっていただろうか。僕にとってはとても長く感じたが、何も起こらない。あのままいけば僕は真っ二つである。しかし、何の変化もない。

おそろおそろ、僕は目を開けていった。

そんな僕の目の前には、驚くべき光景が広がっていた。

僕はその光景に目を丸くし、しばらく目を離せないでいた。

そこには、僕自身ではなく影のほうで、なんと一刀両断、真っ二つになっているではないか。

何が起こったのか僕は理解できないでいた。

すると、真っ二つにされた影が黒い煙となって霧散していくのと同時に、その後ろから人影が現れた。

その人影の正体を知り、僕はますます驚愕することになった。

「あら、あなただったのね。助けて損したかしら」

そう、そこに現れたのは夢野さんだった。

「ど、どうしてここに？」

おたおたしながら、僕は夢野さんに問いかける。これはびっくりしたところではない。

「どうしてって、どうしてかしら」

「いや、質問に答えてないよ。それに質問を質問で返されても困るんだけど」

「じゃあ、代わりに私の質問に答えてくれるかしら？どうしてあなたは、夢の中で自由に動いているのかしら？」

「はい？言っている意味が分からないんだけど……」

「それはあなたがバカだということになるわね」

「…バカって言うなよ」

「はあ」

夢野さんは大きなため息をついた。そして僕のほうを、やはりバカにしたような目で見つめてくる。この視線は結構痛い。僕はどうすることもできず、その視線に耐えるしかなかった。

「それでどういう意味なのか、このバカな僕にもわかるように説明してくれませんか？」

半ばやけくそに言う僕に対して、夢野さんは嫌そうな態度を示す。めんどくさいと言わんばかりである。

「あなた、夢を何だと思っているの？」

「夢は、夢でしょ。でも確か夢は、脳が記憶を整理するために活動する際に、知覚される現象だったような……」

そう、すべて兩宮さんの受け売りだけど……

「そうね、間違っていないわ。でも正しいなんて言えないわ、まだ解明されていないんですもの。私はね、簡単に言つと夢は、脳が見せる筋書きのあるドラマのようなものだと考えているわ」

「ドラマ……？」

「だってそうでしょ。夢は見せられるものであって、こちらからは干渉できない。ドラマには台本があるように、ある程度は筋書きが決まっついていて、それを脳が一方的に見せてくる。テレビの前に座っている私たちのように、完全な受け身な状態。誰も台本を書きかえることはできないでしょ。」

でも中には、私やあなたのように台本自体に影響を及ぼせられる存在もいる。つまり、夢に干渉できる。こう言っても、分からないわよね。今すぐ理解しろなんて言わないわ。でも、夢について考えるだけ無駄なことかもしれないわね。考えると分からなくなってくるもの」

「分かったような、分からないような……」

「だから、考えるだけ無駄よ、バカな子には。今言えることは、ここは夢の中で、私とあなたがいるとうことだけ。ああ、さっきまであの影のような化け物もいたわね」

そう言つと夢野さんは、化け物がいたであろう場所を嫌そうな表情で見つめ、すぐに顔をそむける。まるで汚いものを見たかのよう

に。
僕は少し混乱しつつも、この際だから聞きたいことをすべて聞こうと思った。

「今の化け物はなに？」

「私たちは影と呼んでいるものよ」

「影…？」

「夢の中で生きる怪物。悪魔の使い魔」

だんだんとファンタジーになってきた。僕はここでいったん整理する。

「あおう、ちょっといいですか？ここは僕の夢の中で間違いないんだよね」

「そうよ」

「だったら今会っている夢野さんは、夢の中の夢野さんなんだよね…っていうか何言っているんだ僕は。混乱してきたんだけど…」

「だから言ったでしょ、考えるだけ無駄よ。今の私は夢の中の私。肉体は家で眠りにについているわよ。これでいいのかしら？」

「ありがとう。……そうだよな、うん、そうだ、これは夢なんだ。

夢の中だから何があっても大丈夫だよな。さつき助けてもらつていてんだけど、別にあの影にやられてもなんともなかったんだよな。すぐリアルでビビっちゃったけど」

「いいえ、助けなかつたら死んでいたわよ。あなたが私と同じなら」

「…はい？……どういうこと？」

さつきからちつとも話の全体像が見えてこない。話がかみ合っていないような気がする。いや、かみ合つてはいるのだけれど意味が通じていないような。この夢もどこかおかしいし、夢野さんの存在もどこか違和感がある。しかしこの違和感、前にも感じたことがあるような気がする。必死に考え思い出そうとする。そこで僕は思い当たった。この前の夢の中で龍臣に会った時にもこの違和感を感じ

た。龍臣と夢野さんは何か関係があるのだろうか。本当に分からないことだらけだ。話を聞いてもいまいちわからないし…疑問だけが生まれていく…

「つまり、私と同じなら普通の人よりも夢の中の自分と肉体とのつながりが強いから、なんらかの影響は出るでしょうね。下手すればそのまま死んでいた可能性もあるわ」

「さっきから同じこと言っているけど、夢野さんと僕が同じってどういうこと？確か学校でも同じ匂いがあるって言ってたけど。そこが分からない限り、いくら話しても無駄な子がするんだけど」

「そうね、言いたくはないんだけど…」

夢野さんはそう言って、黙ってしまった。何かを考えている様子だ。言葉を少しずつ、慎重に選んでいるように見える。思案すること数分が立ち、夢野さんはやっとのことで、その沈黙を破った。

「言うわ：私は人間じゃないの。人間ではない、あやかし。夢を食らい、夢と共の生きる存在、獺なのよ」

「へえ？」

変な声が出た。夢野さんが言った言葉をすぐに理解できなかった。当たり前だろう。自分は人間じゃないなんて、しかもあの獺だって？ 獺は知っている、中国の妖怪で人の悪夢を食べてくれる良い妖怪だ。それが目の前にいる夢野さんだというのか。バカバカしいにもほどがある。

「何言ってるの？ふざけるのもいいかげんに…」

「ふざけてないわ、真剣よ」

「うそだろ…」

「いいえ、真実よ。こんなときに冗談なんて言わないわ」

沈黙が流れる。いまだにその真実を飲み込むことができない。でも、夢野さんの目は真剣そのものだ。嘘をついている感じもない。ならば、受け入れるしかないのだろうか。

まだ混乱している僕をよそに、夢野さんは話し始めた。

「私は獺だから、人の夢を食べることもできれば、人の夢に入り込み干渉することだってできる。現に今がその状態ね。あなたの夢の中に入り込んでいる。すべての夢は私にとって、食事ではないわ」「どうして僕の夢の中に…？僕の夢でも食べに来たというの？」

「気になったのよ、あなたという存在が。あと犯人探しもしなくちゃならなかったから。でも、いざ来てみたら化け物に襲われているじゃないの、最悪ね」

「で、僕について何かわかったの？」

「分かったわ。あなたは私と同じ力がある。つまり夢に干渉でき、他人の夢の中に入り込むことができる。なぜそんな力が、ただの人

間のあなたにあるか分からないけどね」

夢野さんが話す言葉がスルスルと耳から耳へと抜けていき、頭の中に残らない。人は自分の理解を超えることがあると、脳はそれを受け入れないのかもしれない。しかし、そんなことも言っていられないのかもしれない。現に謎の化け物に襲われ、学校では大変なことになっているのだから。もしかしたら夢野さんは何が起きているのか分かっていないのかもしれない。立って彼女は獺なのだから…もう、どうにでもなれだ。

「夢野さん、聞きたいことがあるんだ」

「何かしら？」

「今日、学校で同じ夢を見た人がたくさん出てきたのは知っているよね。何か思い当たることはないの？夢については夢野さんのほうがよく知っているだろうし…獺だから、さ」

僕は期待を込めた目で夢野さんを見つめる。ここで、彼女が何かを知っているならどんなに救いになるだろうか。こんな不気味な減少は終わりにしてもらいたい。

「…思い当たることはあるわ。今、その犯人を探している途中なの」

「犯人っていったいどういうこと？」

「朝の出来事はきつと夢魔の仕業よ」

「夢魔…？」

「獺と同じで、夢の中で生きる悪魔のことよ。人間の夢の中に入っ
て悪さをするの」

「じゃあ、今回の騒ぎは夢魔の仕業なんだね」

僕はそれを聞き、なぜかホツとした。科学で証明できないような不可思議なことが起こり、僕はただただ不安だったのだろう。それが今、一つの答えにたどり着いた。その答えが突拍子のないことでも、それでも原因がわかったことは僕にとって大きな一歩のように思える。

「原因は分かったけど、それからどうするの？」

「言ったじゃない、犯人を見つけるって」

「犯人は夢魔なんですよ？」

「違うわ、人間よ」

「えっ…どういう…」

犯人は人間だという言葉に僕は絶句した。僕は夢野さんを見据えた。その目は嘘偽りのないまっすぐな瞳だった。つまり本当に犯人は人間の誰かなのだろう。僕は信じられなかった。そして夢野さんは話を続けた。

「夢魔は確かに人に悪さをする。でも、その力は微々たるもの。その力を最大限に発揮できるのは、人間と契約したものだだけよ。つまり今回の事件は規模からいって、人間と契約した夢魔が起こしたものだと推測される。よって私はその契約した人間を探さなくてはならないの。そこに夢魔もいるだろうからね」

「どうやって探すの？」

「まず契約内容を推測して、そこから今回の事件に当てはめて考える。そして関わりの深い人物を特定するってところかしら。契約内容によくあるのは、お前の願いをかなえてやるということが多いわだからこの事件で誰かが願いをかなえてもらっているだろうから、そこから考えるしかないわね」

彼女の言葉はもつともだった。確かに犯人を見つけるにはその方法しかないだろう。みんながみんな同じ夢を見るこの事件の裏側で、誰かの願いが叶っている。しかし僕にはどんな願いなのか見当もつかない。そんな僕の表情を読み取ったのか、夢野さんは無表情のまま、僕に話しかけた。

「心配しなくても大丈夫よ。こっちは一応プロよ。すぐにでも犯人を特定するから。それにお兄様もいるし」

「やっぱり、夢野先生も獏なんだ…」

「当たり前でしょ、兄妹なんだから。はあ、少し話しすぎたわね。疲れてしまったわ」

「そ、そうだね」

夢野さんのいつもの教室にいるときから考えると、確かに今夜は饒舌だった。こんなにもしゃべる彼女を見たことがなかった。しかし考えると、これだけしゃべれるということだから、もつと教室では話してほしいと思う。でも、これだけしゃべる夢野さんを自分だけが知っているということは、なんだか特別になつた感じがする。きつとほかの男子はうらやましがらるだろう。そんなバカなことを考えていると、

「もうすぐ夜が明けるわ」

夢野さんは周りを見渡しながら、そう告げた。彼女には分かるのだろう、もちろん夢に関してはエキスパートの猿なのだから。

「早く目覚めることをおすすめるわ、この悪夢はよくないものだから」

「よくないって？」

「人のエネルギーを奪う悪夢みたいね。あまり見すぎると、人体に影響を及ぼしかねないわ」

「そ、そんなの聞いてないよ！」

「今、言った」

「じゃあ、見ている人みんなに影響があるんだね」

「ええ、だからこそ早く犯人を見つけなくてはいけないの。それじゃあ高原くん、また明日ね」

そう言うと夢野さんは闇の向こうに溶け込むように消えていった。初めて名前を呼ばれた僕は、驚きとうれしさが合いなつて、夢野さんの言葉に答えることができなかつたのだつた。

今日はなんとなくだが、学校に行くのが少しためられた。いや、なんとなくではない。

理由はある。昨日の夢の中で起きたこと、あれは本当に起きたことなのだろうか。夢なのではないか、いや夢の中で起きたことだから夢なのだが：考えるとわけがわからなくなってくる。でも確かなことは、夢野さんとはどんな顔で会えばいいか分からないということだ。

彼女は自分を人間ではないと言っていた。しかも、獺であるときえ言っていた。

僕はいまだにその言葉が信じられなかった。夢から覚め、冷静に考えてみるとやはりおかしいとしか思えない。夢野さんの頭がおかしいのか、自分が信じていないだけで彼女の言うことは正しいのか…

獺：夢を食べるあやかし。夢野さんの正体。

夢魔：それは夢の中にいる悪魔。今回の事件の原因。

僕にとってそれはファンタジーの世界のことで、まるで現実味を帯びていない。夢野さんの話自体は理解できたが、それを受け入れるかどうかはまた別問題であろう。

そんな事を思いながら学校に向かったのだが、夢野さんは普通に教室の自分の席に座っていた。僕とはまるで何事もなかったかのよう。

そしてある授業中、僕は彼女の獺としての片りんを見てしまった

……

「ええ、この数式は……」

先生が必死で授業を行っている。しかし、よく見るとちらほらと眠っている生徒がいる。

僕は斜め前の男子に目を向けると、案の定すやすやと眠っている。とても気持ちよさそうだ。ときどきニヤニヤ笑うのはどうしてだろう。すごく気になる。

そんな時だ。

その寝ている男子生徒の頭から白い煙のようなものが出始めたではないか。

僕は驚き、その煙を凝視する。隣の川島くんは全く気付いていないようだった。すると、その煙は後ろのほうに向かって流れている。僕はその煙を目で追っていった。

行きついた先は夢野さんのいる席だった。よく見ると煙は、夢野さんの手のひらで玉のように形をなし、集まっている。煙が男子生徒の頭からで終わったときには、手のひらのそれは白い大きな飴玉のようになっていた。

そして、夢野さんはそれをパクつと食べてしまった。

「えっ……」

僕は驚愕した。あれを食べてしまった……

そんな僕の様子に気付いたのか、夢野さんは平然とした様子で話しかけてきた。

「あら、見えたの？ やっぱり力があると見えてしまうのね」

「今の何？」

僕は、黒板の前の先生を気にしながらも夢野さんに尋ねる。

「今のは夢よ。夢を食べたの」

「夢？ 今のが？」

「そうよ、夢。獏だから夢を食べて何が悪いの？」

「悪いとは言っていないけど……夢って白い煙のように見えるんだ……」

僕は感心した様子でうなずいた。夢を実体化すると、あんな白い煙のようなものになるみたいだ。なんかイメージしていたのと違う。もっとキラキラした明るいものをイメージしていたので、僕自身がつかりである。

「でも、あんまりおいしくなかったわ」

夢野さんは残念そうにつぶやく。

「夢にもおいしい、おいしくないってのがあるの？」

「当たり前じゃない。今のはおいしくなかったわ。この子、なんかいやらしい夢でも見ていたみたいね。そういう夢はおいしくないわもつと楽しそうな夢はおいしいの。怖い夢とかは最悪ね」

「夢の内容まで分かるんだ……」

これで男子生徒がニヤニヤ笑っていた理由がわかったが、僕は一つ心に決めたことがあった。もう、夢野さんの前では寝るようなことはしないでおこう。夢を食べられてしまう、夢を見られてしまう。それだけはごめんだった。

「ああ、そうだ。夢って見たことは覚えているけど内容は覚えてないってことが多いけど、それって獺に食べられているからなのかな？」

僕は思いついたことを口にした。

すると、夢野さんはクスツと笑って、

「それはどうかしらね」

と言った。

僕は絶対何かあると思ったが、それ以上は口にしなかった。なぜか聞いてはいけないような気がしたからだ。

「そこ、うるさいぞ！」

先生に注意されてしまった。みんなの注目を浴びながら、僕はいそいそと前を向いたのだった。もちろん夢野さんは何食わぬ顔である。

そんなことがあった授業中。

しかしそれ以外、僕たちは話をするとはなかった。

夢野さんは転校してきたからは友達を作らず、席で本を読むばかり。それをほかの男子たちが見ているというのが当たり前となっていた。

僕はというと、休み時間は兩宮さんや龍臣と話をしたりして過ごすのだけれど、この日は夢野さんのことが気になって、彼女のほう

ばかり見ていたかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7683y/>

無限のナイトメア

2011年12月25日23時51分発行